

衝突の際、ヘルメットには衝撃エネルギーが発生するので、頭を護るために、そのエネルギーを適切に処理しなければなりません。一般的に、その主役は『衝撃の吸収』と捉えられていますが、いかなるヘルメットにも、衝撃吸収の能力には限界があります。多くの方は気づいていないかもしませんが、大きな事故で頭が護られた事例では、衝撃吸収の以前に、ヘルメットには吸収とは違う、もう一つの大切なエネルギーの処理が働いています。それが、『かわす処理』です。厳しい現実の事例でも、『かわす性能』と『衝撃吸収性能』の2つが働けば、頭を護れる確率は高まります。それは、いかなるヘルメットにも当てはまることです。だからこそ、ヘルメットの中にエネルギーに向かわせずにすませる『かわす性能』が重要なのです。

転倒例を検証すると、衝撃の痕跡は、滑らかな面を継続して残っている方が、ヘルメットが動き続けている。すなわち、かわす性能を発揮し続けていると予測されます。だから、アライのフォルムは、あくまで丸く滑らかです。昔からの変わらないフォルムにも見られますが、衝撃を丸い面で受け止める方が、より衝撃を緩和できると考え、フルフェイス登場時の砲弾型から、丸い面の連続が繋がる、卵型へと進化し続けています。

またシェルの下部にある立体的なリブは、衝撃を受けた際、クラックがシェルを突き抜ける形でなく、リブで止める目的で設計されています。アライのフォルムは、全ての要素が機能に結び付けられています。

『かわす性能』を 活かすフォルム!

「かわす」ために
スベスベが大切
なんですね!

【かわす性能】頭を護るためにの取り組み②



ほんの一部の紹介ですが、アライのフォルムのこだわりをおわかりいただけたでしょうか？

次回もまた、アライの頭を護る性能向上のための取り組みをご紹介いたします。

